

親子の近くに拠点を

佐藤 英子（青森県）

2011年3月11日、私はスタッフとして「さんぽぼ」にいました。地震の揺れの中、逃げ道確保のためにスライドドアを押さえながら、非常口の看板が見たこともないくらい揺れていたのを覚えています。

揺れの直後に停電し、非常灯のみになった中、「6階なので、地面にいるよりも強く揺れを感じるんですよ」と、私は中にいた7家族に声をかけ続けていました。そして、全員を避難誘導し終えた後も、何が起こったのか全くわからないような状態で、とにかく帰路に着いたのです。

翌日には停電も復旧し、テレビから流れ

る信じがたい映像を見ながら、心配だったのは、昨日利用者の方が無事に家に帰れただろうか…ということでした。

「さんぽぼ」は商業施設も入っているビルの中にあり、一日安全確認のために休館したものの、翌日には開館し、ひろばも通常通りの開設となりました。

こんな時に利用者の方は来てくれるのだろうか…そんな思いとは裏腹に、3月13日6家族、14日5家族、15日13家族、16日25家族…と、少ないながらも、誰も来ない日はありませんでした。余震が続き、ガソリンスタンドには長蛇の列、スーパーマーケットからは品物がなくなり、空気そのものが重くのしかかるような中で、なぜひろばへ来るのかを私は尋ねました。

すると、「家で子どもと二人きりであるのは不安。何かあっても、ここにいれば安心」という答えが返ってきたのです。ここにいれば安心する…それは、スタッフにとって

は喜ばしいことであり、ひろばの役割としても望ましいことだと思います。それが日常の中であれば。しかし、未曾有の大震災の中でそれは、地域の中で安心できる場所がないということでないか…そう思えるのです。わざわざ家からひろばまで来なければ、自分と子どもが安心できる場所がないのであれば、地域子育て支援拠点の、「地域」とは一体何なのか。それは、すぐそばにいる（ある）安心安全な場所であるべきではないのか。

私達が震災後も通常の開設をして「安心」を提供してきた一方で、閉館することで「安全」を確保しようとした施設もあります。外出することで生じる危険から身を守るため、「安全」な家の中にあるようにということかもしれません。しかし、続く余震とニュースの映像に怯える日々のどこに「安心」を求めればよいのでしょうか？

「さんぽぼ」には、多い日では50家族を超える利用者があります。しかし、このようなひろばが一つあるよりも、20家族が集う場所が5カ所ある方が、より近くで安心できる繋がりを持てるのではないかと思います。本当の「地域」に、安心安全な心の拠り所、拠点はあるべきではないでしょうか。

